

細見美術館所蔵六観音像について

慶應義塾大学 米沢 玲

六観音は六道跋苦への信仰を背景に、摂関期から院政期の貴族社会で大いに流行をみたが、修法記録に比して彫刻・画像ともに遺品は少なく、鎌倉時代以前のもは数える程である。京都・細見美術館が所蔵する六観音画像(現状で馬頭観音像を欠く五幅構成)は、制作が鎌倉時代に遡るとみられる貴重な仏画の大作であるにもかかわらず、未だ本格的に研究されていない。

頼瑜の『秘抄問答』に記載される「仁海注進文」によれば、不空羅索観音に代わって准胝観音を含む構成の細見本は、東密系の六観音といえる。この点については即断できないが、本画像には東寺伝来の箱書きもあり、検証の必要がある。本発表では図像と様式の検討を踏まえ、細見本を東寺伝来とする妥当性、加えて、制作の思想背景に醍醐寺の関与が想定できることを主張する。さらに制作年代の推定を試み、細見本の美術史上の位置づけを行う。

図像の考察では、特徴的な表現を取り上げながら細見本の性格を明らかにする。まず東寺における制作の根拠として、五幅のうちで聖・十一面・如意輪観音像が現図曼荼羅に忠実な伝統的像容に表されること、なかでも十一面観音像は『覚禅鈔』中、東寺灌頂堂に伝わったとされる図像に一致することを指摘する。醍醐寺の関与が認められる特徴としては、聖観音像の臂釧や胸飾などの装飾部分や頭光、頭上の湧雲表現から、その像容が大日如来に擬した特異なものであること、准胝観音画像中に割五鈷杵と見られるモチーフが描かれることに着目して考察をすすめる。聖観音像の像容については、『覚禅鈔』や『真俗雜記問答鈔』の記述を基に、六観音と関わりの深い六字経法において聖観音を中尊にするという醍醐寺の思想があったことを踏まえ、六字経曼荼羅の中央に描かれる一字金輪像とのつながりを想定する。割五鈷杵は人形杵とも呼ばれ、敬愛愛染法の際に用いるとされるが、『覚禅鈔』や『薄草子口決』の記述を検討すると、ここにも醍醐寺との関わりが考えられる。

制作年代については、まず文様を中心に検討し、本画像を14世紀前後の制作と推定した上で、特に様式的に近似する比較作例として、正和2年(1313)頃の制作とされる醍醐寺の大元帥明王画像六幅、そして、東寺長者・寛恵(1302~1343)が施入したとの説がある東寺の乙本曼荼羅を挙げる。さらに当時の東寺長者と醍醐寺座主との関わりを考察し、細見本を14世紀前半の制作と考えたい。

以上、図像および様式の検討から、細見本を東寺伝来の東密系六観音とする蓋然性と、制作に醍醐寺が深く関わった可能性を提示し、およそその制作年代を推定することで、本画像の美術史的意義に一案を示したい。